大手前大学論集　第20号（2019）1－13頁

日本と中国の梁燕

丹羽博之

要旨

梁燕は日本と中国で別々の比喩として用いられるが、本稿ではその淵源をたどる。中国に於いては、梁燕は小人物の比喩として使われることがある。

白居易「題贈平泉韋徵君拾遺」（三一八五）

籠鶏与梁燕　籠鶏と梁燕と

不信有冥鴻　信ぜず冥鴻あるを

とあり、佐久節『白楽天全集』には、「梁燕」を、「梁上に集くふ燕。小人に喩ふ。」とある。また、『漢語大詞典』には、次のようにある。

梁燕「梁上的燕。比喩小才。五代王定保《唐摭言「別頭及第」》『「時楊知至因以長句呈同年曰「由来梁燕与冥鴻、不合翩翾向碧空」』。

この梁燕のイメージは、『史記』（陳渉世家）の有名な「燕雀安知鴻鵠之志」によるものであろう。

一方、日本では「梁（うつばり）の燕」は、謡曲「丹後物狂」（岩波旧大系）に見える。

それ親の子を思ふこと、人倫に限らず、焼け野の雉夜の鶴、梁の燕に至るまで、子ゆゑ命を捨つるなり。

とあり、頭注に

幸若舞の山中常磐に「梁の燕も子ゆへ小蛇の餌とはなる」とあるが、典拠不明。

とある。

これら、日本古典の「梁燕」は、白詩の「燕詩示劉叟」（〇〇四一）に拠るものであろう。

燕の子育てを活き活きと描写した後、結局は雛たちは成鳥すると親を捨てて、四散し親を嘆かせるという内容で、子が自分から去ったことを嘆く劉叟に、自分も若い時には、親を捨てたではないかと諭したもの。

この詩は、『菅家後集』にも、「無酒無琴何物足、紫燕之雛黄雀児」（「詠楽天北窓三友詩」477）にも利用されており、中世においても、謡曲などでは、「焼け野の雉」「夜の鶴」と並んで子を愛する親の愛の譬えとしてよく引かれる。更に漢詩にも

燕吟午静小窓間　　辛苦営巣幾往還
対主喃喃説何事　　去年人易去年顔

『翰林五鳳集』（巻三）　熙春

と詠まれている。これら日本の燕のイメージは二十世紀まで脈々とうけつがれた。一九四五年学徒出陣で戦死した、真鍋真次郎氏の姉宛の手紙にも白詩が引用されている。

キーワード：白居易、菅原道真、謡曲、幸若舞

一、白詩の「燕詩示劉叟」と日本文学

日本の梁燕の元になった白詩の「燕詩示劉叟」（〇〇四一）を挙げる。

燕詩示劉叟　燕の詩　劉叟に示す
梁上有双燕　梁上に　双燕有り
翩翩雄與雌　翩翩（へんぺん）たり　雄と雌と
銜泥両椽間　泥を銜む　両椽（りょうてん）の間
一巣生四児　一巣　四児を生む
索食声孜孜　食を索（もと）め　声孜孜（ししし）たり
青虫不易捕　青虫は　捕へ易からず
黄口無飽期　黄口　飽く期無し
觜爪雖欲敝　觜爪（しそう）　敝（やぶ）れんと欲すれども
心力不知疲　心力　疲れを知らず
（中略）
一旦羽翼成　一旦　羽翼成れば
引上庭樹枝　引きて庭樹の枝に上らしむ
擧翅不回顧　翅（はね）を挙げて　回顧せず
随風四散飛　風に随ひて　四散して飛ぶ

雌雄空中鳴　雌雄　空中に鳴き
声尽呼不帰　声尽き　呼べども帰らず
却入空巣裏　却って　空巣の裏に入り
啁啾終夜悲　啾啾（しゅうしゅう）　終夜悲しむ
燕燕爾勿悲　燕よ燕よ　爾（なんぢ）悲しむこと勿れ
爾當返自思　爾当に返りて　自らを思ふべし
思爾為雛日　思へ　爾雛為りし日
高飛背母時　高く飛びて　母に背きし時を
當時父母念　当時の父母の念
今日爾應知　今日　爾応に知るべし

（那波本に拠る）

『白香山詩集』（中国文学名著第三集　世界書局）には

叟有愛子。背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時。亦嘗如是。故作燕詩以諭之。

（叟愛子有り。叟に背きて逃れ去る。叟甚だ悲しみて之を念ふ。叟少年の時。亦た嘗是（かつてか）くの如し。故に燕の詩を作りて以て之を諭（さと）す。）

の自注がある。燕の子育てを活き活きと描写した後、結局は雛たちは成鳥すると親を見捨てて、四散し親を嘆かせるという内容で、子が自分から去ったことを嘆く劉叟に、自分も若い時には、親を捨てたではないかと諭したもの。

一方、日本では「梁（うつばり）の燕」は、『日本国語大事典』（二版）には

梁に巣を作り雛を育てる燕の意で、我が子を思う親の愛情のたとえにいう。

（用例）謡曲「丹後物狂」幸若・山中常磐

とある。謡曲「丹後物狂」（岩波旧大系）には、

それ親の子を思ふこと、人倫に限らず、焼け野の雉夜の鶴、梁の燕に至まで、子ゆゑ命を捨つるなり。

とあり、頭注に

「幸若舞」の山中常磐に「梁の燕も子ゆへ小蛇の餌とはなる」とあるが、典拠不明。

とある。補注には、

梁の燕は、焼野の雉や夜の鶴と並んで、子を愛する親の愛の譬えによく引かれ、謡曲では、唐舟に「例へば、親の子を思ふ事、人倫に限らず、焼け野の雉梁の燕夜の鶴、子ゆゑにこそ物思へ」廃曲島廻「げにや親の子を思ふ事、人倫に限らず、焼け野の雉梁の燕、夜の鶴子ゆゑに命を捨つる習ひ」廃曲切兼曽我に「げにや生きとし生けるもの、子を悲しまぬ者やある梁の燕野の雉、子ゆゑに身を忘れ、哀猿腸を断つも、今目の前にあはれなり」などと見える。（以下略）

この他、謡曲「竹雪」にも「身を梁の燕のならひ」と見える。これらの謡曲の「梁燕」は前掲の白詩によるものであろう。

この白詩の「燕詩」は、『菅家後集』（詠「楽天北窓三友詩」」477）にも、

無酒無琴何物足　酒も無く琴も無し　何れの物か足らむ
紫燕之雛黄雀児　紫燕の雛　黄雀の児
燕雀殊種遂生一　燕雀種殊なれど　生を遂ぐること一つなり
雌雄擁護遞扶持　雌雄擁護して　遞(たが)ひに扶持す

と利用されている。[1] 中世においても、謡曲などでは、「焼け野の雉」「夜の鶴」と並んで子を愛する親の愛の譬えとしてよく引かれる。更に

燕吟午静小窓間　燕は吟ず午の静に　小窓の間
辛苦営巣幾往還　辛苦営巣し　幾たびか往還す
対主喃喃説何事　主に対し喃喃　何事をか説く
去年人易去年顔　去年の人は去年の顔を去り易し？（訓不明）

『翰林五鳳集』（巻三）　熙春（国会図書館本）

と詠まれている。これら日本の梁燕のイメージは二十世紀まで脈々とうけつがれた。一九四五年学徒出陣で戦死した、真鍋真次郎の姉宛の手紙にも白詩が引用されている。[1]『雲ながるる果てに』（白鷗遺族会編・河出書房新社　一九九五年）には、「愛児への便り」（この植村真久の便りは胸を打つ）、「靖国の社頭で」「最後の手紙」等の文があり、その中に「燕の詩に思う」という一文がある。

真鍋信次郎
九州専門学校　福岡県　十三期飛行予備学生　二十年五月二十五日　南西諸島にて戦死　二十二歳
（前半略）

変なことばかり書きましたが、しかし、散るべき時にはにっこりと散る。だが、生きねばならぬ時は石にかじりついても生きぬく、これがほんとうの日本男子だと思います。御安心ください。も一つ自分の願いを聞いていただきたい。次に書く白楽天の「燕の詩」、（前掲「燕詩」を書き下し文にして全て書き写してある）

以上のごとく彼等の子を思う心、まして我々の両親の我々をいつくしみそだてられた恩の大きさにおいては非常に大なるものと思う。いろいろの大なる苦難にうちかって、我々をこのようにそだてあげられた御恩について考えよう。涙が流れる。どうしてもお母さんだけには理屈ぽいことばかり書いたが、こんなことは貴女にはよくわかっていると思います。しかし、真理とはきわめて平凡なものです。だが、その実行はなかなかできないものです。

樹静まらんと欲すれど風やまず
子養はんと欲すれど親またず
ゆきて追ふべからざるは親なり

です。以上については、よくよくヨシ子にいいふくめて下さい。これが貴女に対する最大のねがいです。最後に両親によろしく、また兄さんの全快の一日も早からんことを祈って擱筆します。

健康にご注意下さい。

姉上様　　信次郎拝

「二十二歳　戦死」に胸が痛む。生きておられたら、後世に名を残す人物に成っていたかも知れない。この真鍋の手紙から、白詩の「燕詩」に注目するようになった。その結果、王維の「黄雀詩」や『菅家後集』の詩と白詩の燕詩との関係にも気づいた。

白楽天の真意は後半にある。子は結局親の育雛の辛苦を顧みずに独立するものであると詠む。しかし、日本人は寧ろ前半部の雌雄がせっせと雛を育てる描写に心を奪われた。この白詩は、『漢詩集〔律詩・古詩編〕』（財団法人　日本吟剣詩舞振興会編　一九八一年）やその他の詩吟集にも収録されており、昔から日本ではよく吟じられていた。しかし、これら日本の詩吟集には、白香山集の自注は掲

載されておらず、白楽天の寓意は見過ごされていた可能性が高い。真鍋はそうした詩吟集から白楽天の「燕詩」を知り、親鳥の真摯な子育ての描写に素直に感動し、姉に送ったものであろう。

二、白詩以前の先行作品

以下に白詩が参考にした先行作品を挙げる。『孔子家語』（顔回篇　新釈漢文大系）には以下の話を載せる。

孔子在衛。昧旦晨興。顔回侍側。聞哭者之声甚哀。子曰。回、汝知此何所哭乎。対曰回以此哭声非但為死者而已、又有生離別者也。子曰、何以知之。対曰回聞、桓山之鳥生四子焉、羽翼既成、将分于四海。其母悲鳴而送之。哀声有似於此。謂其往而不返也。回竊以音類而知之。孔子使人問哭者。果曰、夫死家貧。売子以葬、与之長決。子曰回也善於識音矣

孔子衛に在り。昧旦晨興。顔回側らに侍す。哭する者の声甚だ哀しきを聞く。子曰く。回よ、汝此れ何の哭する所なるかを知るか、と。対へて曰く、回以へらく此の哭声は但だに死者の為にするのみに非ず、又た生離別有る者なり、と。子曰く、何を以て之を知る、と。対へて曰く、回聞く、桓山の鳥、四子を生む、羽翼既に成り、将に四海に分かれんとす。其の母悲鳴して之を送る、と。哀声此に似たる有り。其の往きて返らざるが謂なり。回竊(ひそ)かに音の類するを以て之を知る、と。孔子人をして哭する者に問はしむ。果して曰く、夫死し家貧し。子を売り以て葬り、之と長決す。子曰く回や音を識るに善し、と。

母親鳥の子との別れの悲しみが白詩と共通し、「鳥生四子」「羽翼既成」が前掲の白楽天の「燕詩」と類似しており、この詩を参考にしたことはあきらかであろう。新釈漢文大系『白氏文集』もこの「燕」詩の注に『孔子家語』を挙げる。この話は、日本でも夙に『蜻蛉日記』（中巻・安和二（九六九）年六月）に、

四つに別るる　群鳥の　おのがちりぢり　巣離れて　わづかにとまる　巣守にも　何かはかひの　あるべきと

とあり、已に十世紀の日本女性にも「四鳥の別れ」は知られていた。当時の女性の漢文学の知識の高さが窺われる。その他、『保元物語』（為朝降参事）に「鳥にあらざれども、四鳥の別れを悲しみ」とあり、『椿説弓張月』にも引かれている。『日本国語大辞典』は、「四鳥の別れ」の例として『保元物語』を挙げるが、用例としては『蜻蛉日記』にまで遡れる。

次に『芸文類聚』（巻九十二　鳥部下鷰　中文出版社）を挙げる。

晋傅統妻辛女鷰頌曰、翩翩玄鳥、載飛載揚、頡頏庭宇、遂集我堂、銜泥啄草、造作室房、避彼湫隘、処此高涼、孕育五子、靡夭靡傷、羽翼既就、縦心翺翔、顧影逸予、其楽難忘

晋傅統の妻辛女の鷰頌に曰く、翩翩たる玄鳥、載ち飛び載ち揚ぐ、頡頏たる庭宇、遂に我が堂に集ふ、泥を銜へ草を啄び、室房を造作し、彼の湫隘を避け、此の高涼に処り、五子を孕み育て、夭する靡く傷つくる靡し、羽翼既に就り、翺翔すること縦心、影を顧み逸予たり、其の楽しみ忘れ難し。

燕が雛の無事の巣立ちを喜ぶ「頌」であり、白詩の「燕」や『孔子家語』の親鳥の嘆きとは真逆である。冒頭の「翩翩玄鳥」や「銜泥」「羽翼既就」等が前掲白詩と類似しており、白楽天が『芸文類聚』を利用したことは明らかであろう。

この他、王維の「黄雀癡」（『王維全詩集』（六）国訳漢文大成）の詩も白詩と関係する。

黄雀癡　黄雀癡　黄雀癡かなり　黄雀癡かなり
謂言青鷇是我兒　謂ひて言ふ　青鷇は是れ我が兒なりと
一一口銜食　一一　口に食を銜み

養得成毛衣　養ひ得て　毛衣を成し
到大啁啾解游颺　大なるに到りて　啁啾（ちうしう）として　游颺（いうやう）を解し
各自東西南北飛　各自　東西南北に飛ぶ
薄暮空巣上　薄暮　空巣の上
羈雌独自帰　羈雌（きし）　独り自ら帰る
鳳凰九雛亦如此　鳳凰の九雛も　亦た此くの如し
慎莫愁思憔悴損容輝　慎みて愁思し憔悴して容輝を損すること莫かれ

「啁啾」「空巣」が共通し、「一一口銜食」と「一一刷毛衣」、「各自東西南北飛」と「随風四散飛」が類似し、白楽天が王維の詩を参考にしたことは明白である。(2)

白楽天の「燕詩」は『孔子家語』『芸文類聚』及び、王維詩の表現を巧みに取り込んで作詩されている。一見何気なく見える白詩の表現の背景には、このような幾多の先行作品の利用があり、彼の非凡な才能が認められる。

三、中国の梁燕

他方、中国に於いては、「梁燕」は、文字通り、梁の燕として詠まれることが多いが、つまらない、取るに足らない人物の比喩として使われる。

五代王定保の『唐摭言』「別頭及第」に

時楊知至、因以長句呈同年曰　由来梁燕与冥鴻　不合翩翾向碧空

時に楊知至、因りて長句を以て同年に呈して曰はく、由来梁燕と冥鴻と、翩翩として碧空に向かふに合はず

とあり、『漢語大詞典』には「梁上的燕。比喩小才」とある。この梁燕のイメージは、『史記』（陳渉世家）の有名は「燕雀安知鴻鵠之志」によるものであろう。後代に於いても燕雀は弱小の鳥として詠み継がれていく。

白楽天「題二贈平泉韋徵君拾遺一」（三一八五）に

籠鶏与梁燕　籠鶏と梁燕と
不信有冥鴻　信ぜず冥鴻あるを

とあり、佐久節『白楽天全集』には、「梁燕」を、「梁上に集くふ燕。小人に喩ふ、」とあり、「冥鴻」に「高く天上に飛ぶ雁。高士に喩ふ」、の注がある

また、夫婦仲睦ましいものとして詠まれる。白楽天の「新楽府五十首」の「上陽白髪人」（〇一三一）には、

宮鬺百囀愁厭聞　宮鬺百囀するも　愁ひては聞くを厭ひ
梁燕双棲老休妬　梁燕双棲するも　老いては妬むを休む
鶯帰燕去長悄然　鶯帰り燕去り　長く悄然
春往秋来不記年　春往き秋来たりて　年を記せず

とある。夫婦仲睦ましい梁燕をも上陽白髪の老宮女は高齢ゆえ嫉妬することも休む、と描く。

日本漢詩に於いても、『凌雲集』の賀陽豊年「高士吟（47）」（小島憲之『国風暗黒時代の文学』中（中）塙書房）の詩に、

寄言燕雀徒　　言を寄す　燕雀の徒
寧知鴻鵠路　　寧(いづく)ぞ知らん　鴻鵠の路

とあり、燕雀は小人物・小者の意味として詠まれることもある。

結び

以上見てきたように、日本に於ける「梁燕」は、白詩から影響を受けて親の雛を一途に育てる鳥としてのイメージが定着し、夙に『菅家文草』に見える。中世になっても、「梁燕」は、謡曲「丹後物狂」等にしばしば「夜の鶴」「焼け野の雉」とともに親の子を思う愛情の深さの例として慣用句の如くに登場し、日本漢詩においても『翰林五鳳集』にも詠まれている。更に近代の詩吟集にも白詩の「燕」詩は収録され、詠い継がれた。おそらくその詩吟集から、この前の大戦中の一学徒兵の心を惹いたと考えられる。

他方、中国に於いて、梁燕は『史記』等の影響から小人物の比喩として用いられたり、夫婦仲の良い鳥として詠まれるが、親鳥の子を育てる深い愛情というイメージの例は少ない。

注

（1）「軍歌と漢詩（其二）―付、学徒兵の手紙と白楽天の詩―　大手前大学人文科学部論集　第二号　二〇一二年三月」。この論文を発表時には真鍋氏が如何なる径路で、白楽天の「燕」詩を知り得たかについては、触れることができなかった。その後当時の詩吟集に、この白詩の「燕」詩が有ることに気づき、真鍋氏はそれらの詩吟集から「燕」の詩を知ったのであろうと推測できた。

（2）学会発表　丹羽博之　菅原道真の王維「黄雀癡」詩利用　第一三一回和漢比較文学会例会（西部）　二〇一六年四月二十三日　於京都大学

参考

平安朝漢詩に詠まれた燕に関しては、山本登朗氏「名」にちなむ詩歌『文華秀麗集』―「燕」詩群の背景―（『国文学』（関西大学）百号　二〇一六年三月）の論がある。

＊本稿は、和漢比較文学会第十回海外特別例会（於中国・西北大学　二〇一七年八月）において同題で研究発表したものを基にした。参加者から種々の御教示を得た。記して御礼申し上げる。